

『カタカナ言葉』

「ダイバーシティ」という言葉を初めて目にしたのは、6年程前だったと思います。

「ダイバー」は潜水する人。「シティ」は都市。よって「ダイバーの都市？」と、浅はかな予想をしてみました。調べたところ、一言で言うと「多様性」という意味でした。他にも「多様な人材を積極的に活用しようという考え方」「有能な人材の発掘、斬新なアイデアの喚起、社会の多様なニーズへの対応」という意味で使われるそうです。私の予想は、全く見当違いなものだったのです。

英語の綴りはdiversity。英語の形容詞diverse（「ダイバース」と読み、“さまざまな”という意味）を名詞化した語だそうです。ちなみに、都市はcity。英語の綴りを見れば、「ダイバーの都市」というような予想は出てこなかったでしょうが・・・。

もともと英語には興味・関心はあった方なので、カタカナ言葉には、あまり抵抗はなく、またその意味もほぼわかっていたつもりでした。時々、自分の話の中でも「キャパシティの限界」とか「フレキシブルな対応」等、カタカナ言葉が登場していました。

ですが、この頃は、「これは、どういう意味なのだろうか？」と、意味のわからないカタカナ言葉を頻繁に目にするようになってきたなと感じています。また、多少意味がわかっている場合でも他の意味合いで使われている場合もありそうで、「結局、どんな意味で使っているの？」と、半ばあきらめ気味です。

私としては、「イノベーション」は、その代表格です。一応「技術革新（これまでにない新しい技術の開発）」と押さえていますが、「新機軸」「一新」「革新」「新結合」とも解釈されています。より詳しい説明には「新しい技術を開発するだけでなく、従来のモノ、しくみ、組織などを改革して社会的に意義のある新たな価値を創造し、社会に大きな変化をもたらす活動全般を指す」と、かなり幅広く深い捉えになります。もはや一言では言い表せなくなっており、結果覚えることができないので（覚えようとしなくていい・・・）、使うことをためらってしまいます。

ここまで書いて、上述の「イノベーション」の詳しい説明は、「新機軸」や「一新」や「革新」「新結合」をわかりやすくしたものだなと気がつきました。要は「今までにない、全く新しい技術やしくみなどが生まれ、それによって世の中が大きく変わる」という解釈で折り合いをつけています。それにしても、「日本語をもって一言で言い表せない」ことに対してストレスを少し感じてしまうのです。

余談になりますが、「農耕技術の発達」や「蒸気機関に始まる第1次産業革命」や「コンピュータ技術の発達により自動化を促す第3次産業革命」は、イノベーションに当たるのだと、ある雑誌の記事から知りました。そして今、AIやIoT等の技術が牽引する新たな時代「Society 5.0（ソサエティ ゴテンゼロと読みます）」が到来するとさかんに言われています。

AIやIoT等の技術の発達がイノベーションとなるのだそうです。（なお、Societyは、カタカナ言葉を越えて英単語そのものが日本語の文章に組み込まれています）

さて、私がカタカナ言葉を使う場合の意図ですが、まずは「世の中でさかんに使われていること（聞く人も、それなりに理解されていること）」。次に「日本語よりもソフトに伝わる場合」、

そして「ある意味、日本語よりも明確に伝わる可能性がある場合」です。最後に、自分としては、その意味にちゃんと納得していること。

近年、教育現場においても、カタカナ言葉の使用頻度は高まっています。恥ずかしながら「これは、どういう意味だろう？」と、戸惑う場合もあります。そういう場合は、ほぼ、そのカタカナ言葉の意味の説明が長いのです。「つまり、一言で表すと」にこだわる者にとっては、けっこうつらいものがあります。

その一例が、「カリキュラム・マネジメント」です。この4月より小学校が（令和3年度より中学校が）、全面実施となります新学習指導要領の重要なキーワードです。

単純に和訳をすると「教育課程経営」になります。この考え方は、20年程前に研修で学んだ記憶があります。ざっくり言いますと「計画の実施→評価→改善のサイクルで教育課程の質の向上を図りましょう」というものでした。

では、カタカナ言葉で登場した「カリキュラム・マネジメント」は、どのような考え方かと言いますと、

新学習指導要領では次のように説明しています(番号は便宜上付けました)。

① 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、② 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、③ 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、④ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、⑤ 教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと。

突き詰めますと、“「学校の教育活動の質の向上」を図るための学校運営の在り方”が「カリキュラム・マネジメント」と捉えています。上述のように①から⑤までの営みが、「カリキュラム・マネジメント」を実現させるための要素となります。

また、学校運営上の留意事項には、「校長のリーダーシップの下、教職員の適切な役割分担及び相互の連携・協力を生み出し、その学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めることとされており、“学校評価”は、教育活動や学校運営の中核となるので、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意する」とされています。

要素の①「現状把握」、③「評価改善」、④「人材と必要な物の確保」については、イメージはできるのですが、②については、その読み取りと具体化については簡単ではないと感じています。また、繰り返し使われている“教育課程”は「社会に関かれた教育課程」を目指したものであり、新学習指導要領の中核的な理念なのです。この理念の理解も簡単ではないと思います。さらに、この「教育課程」は、これからの時代に求められる教育の実現の使命を包含しており、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念が根底にあります。

ここまで来て、私の集中力と理解力はだいぶ怪しくなってきます。

もし、自分が校長だったら「どうすればいいんだ・・・」と大いに悩むと思いますが、おそらく「無理は禁物。できるところから」と割り切るでしょう。「まずは、一つに絞って、そこでカリキュラム・マネジメントを行う」という方針を打ち出すと思います。絞り方は、それぞれだと思いますが、これまでの情報では、「総合的な学習の時間」や「道徳教育」が、カリキュラム・マネジメントを実現しやすいらしいとのこと。

カタカナ言葉の出現頻度は、今後も右肩上がりだろうと思っています。これからも社会は変化し続け新しい価値が生まれていくと思いますので。

思考停止せずに、生きていく上で支障が出ない程度に向き合っていこうと思っています。